



THE SERVICE CLUB OF THE YMCA
 AFFILIATED WITH THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF Y' S MEN' S CLUB

The Y's Men's Club of Kanazawa

CHARTERED JULY 9, 1947

c/o KANAZAWA YMCA 44-1-202 SATOMI-CHO KANAZAWA 920-0998 JAPAN

国際会長主題	「信念のあるミッション（使命・目標）」 “Mission with Faith”
アジア地域会長主題	「愛をもって奉仕をしよう」 “Through Love, Serve”
西日本区理事主題	「あなたならできる！きっとできる！」 “You can do it! Yes, you can!”
中部部長主題	「踏み出そう 次の一歩のための今の一歩を」
金沢クラブ会長主題	「新しい一歩を踏み出せば、二歩目は自然についてくる」

2016 3 月間強調 J W F

<p>今月の聖句(担当 幸正一誠君)</p> <p>胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。 わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。 まだその一日も造られないうちから。</p> <p style="text-align: right;">詩編 139 編 16 節</p>	<p>3月強調月間</p> <p>JWFは皆様のご厚意によって支えられています。 個人やクラブの記念にあわせて献金をお願いいたします。</p> <p style="text-align: right;">高瀬稔彦 JWF 管理委員長 (岩国みなみクラブ)</p>								
<p>3月例会プログラム</p> <p>と き 2016年3月17日 (Thu.) 18:30~20:30 ところ 金沢ニューグランドホテル 会 費 ¥3,000(会員不要) ¥2,000(メット)</p> <p style="text-align: right;">司会 山内ミハルさん</p> <p>開会・点鐘 清水淳会長 主 題 司 会 者 ワイズソング 一 同 中部部長挨拶 荒川恭次氏 ハッピーバースデー 清水淳会長 食前の感謝 伊藤仁信君 スピーチ 西 信之君</p> <p style="text-align: center;">八幡大菩薩とマリア観音 — 日本人の信仰の姿 —</p> <p>委員会報告 各 委 員 ニコニコタイム 藤井辰男君 Y M C A の 歌 一 同 閉会・点鐘 清水淳会長</p>	<p>2月クラブ活動状況</p> <p>第1例会 (2月18日 Thu.) メ ン : 朝倉、伊藤、数澤、幸正、澁谷、清水、 西、藤井、山内 (9名) メキップ : 山本 出席率 : 100 % メネット : 伊藤、数澤、澁谷、山本 (4名) ゲスト : 木下明彦氏</p> <p>第2例会 (2月1日 Mon.) メ ン : 伊藤、数澤、幸正、澁谷、山内 (5名) メネット : 数澤 (1名)</p> <p>ニコニコタイム 12,000円 クラブファンド 累計 85,000円</p> <p>B F ポイント</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>切手</td> <td>250g</td> <td>累計</td> <td>1,500g</td> </tr> <tr> <td>現金</td> <td>0円</td> <td>累計</td> <td>15,000円</td> </tr> </table>	切手	250g	累計	1,500g	現金	0円	累計	15,000円
切手	250g	累計	1,500g						
現金	0円	累計	15,000円						
<p>会 長 清水 淳 書 記 山内ミハル 副会長 澁谷洋太郎 会 計 伊藤仁信 直前会長 幸正 一誠 メット会長 数澤淑子</p>	<p>第一例会 : 毎月第三木曜日 18:30~20:30 金沢ニューグランドホテル Tel (076)233-1311 第二例会 : 毎月1日 18:30~20:00 金沢ニューグランドホテル 2F (トレド)</p>								

一日に何度も

幸正 一誠

母、明子は大正 15 年 9 月 7 日 幸正九平・ユキの長女としてこの世に生を受けた。両親は従妹同士の結婚のため、その血縁故、子供に恵まれず母は一人子として、また祖父は母が生まれて間もなく急死し、父親の顔を見ることなく祖母に育てられた。女学校卒業後は教員として羽咋市内の小学校に奉職した。私の母校、越路野小学校には当時上中山分校が併設されていた。そこにも何回か勤務したことがある。上中山分校は私の家から徒歩で 60 分位の距離にある山間の分校で、道路は砂利道で雨が降れば道端から水が小川のように上手から足元に流れ込む。両側には鬱蒼とした竹藪や雑木林が生い茂り日中でも日光を遮り今にも……である。特に真冬の雪道を分校まで、あの細いきゃしゃな身体つきの母がどの様にして通っていたのか、その力が何処に在ったのか、その力の源は何だったのか、今でも不思議である。私の同級生に分校生はいなく、上中山がどの様な村なのか判らず大変不思議だった。特に道の途中には三味（さんまい）なる町の火葬場があり、子供心には 1 人では行けない大変怖い箇所（今でも）であった。そこをどの様な思いで母は毎日通っていたのか？

母校、越路野小学校の閉校記念行事があり最後に校歌を歌いたいと思い出かけた。その折、展示の白黒写真の中に若き日の母の先生としての姿を見つけた。その第一印象は「美人だな〜」。写真の中の母の姿は、髪はパーマネントでロングヘアー、後ろで止めていた。顔は当然「若い」。今までに見た事のない「若い母」がそこにいた。母が越路野小学校に勤め、私が多分 2 年生の 4 月頃に、能登一ノ宮気多大社までの遠足があった。昼食が終わり自由時間に、私は桜の木に登り花の小枝を一本折り、他の先生方と共にいる母に差し出した。当然喜んでくれると想っての事だったが、血相を変えて叱られた。私は「母親想いの優しい子」と母が先生方の前で褒めてくれると思っただけで遠い記憶だが今でも覚えている。しかし母は、先生の子供が折っては成らない境内の木を折った事に教育者としてのプライドを傷つけられた、ましてや同僚の面前でと思っただけで違くない。しかし、私は子供心に全く怒られる訳が判らなかつた。

母はとても料理が得意で、学校から帰ると直ぐに着物に着替え、白い割烹着姿になり買い物籠を下げ、千路駅前のかきそしち（木谷商店）へ夕飯の材料の買い出しに行く。私のお気に入りのは手作りの「クリーム」。そ

れは、今のカスタードクリームだと思う。作り方は多分牛乳を火にかけて玉子の黄身を何個か入れ攪拌し、片栗粉？（定かでない）でとろみを付ける。出来上がりを皿に入れサジ（スプーン）で家族で「おいしいね！おいしいね！」と言って食べる。この田舎の中でこんなに美味しい物を食べている子供は私だけだと思い、友達に一言もクリームなる食べ物のお話をしなかつた。今でもこの味に勝るカスタードは無いと思っている。私の癖の一つに食後に「ああ！！おいしかった！！」がある。この癖はこの時がはじまりか？もう一品は「ささ身の甘煮」。これは母の正月料理。お正月しか食べられない我が家の特別料理であった。晩年の母にこの料理を頼んだ処、姉が代わりに作ってくれたが・・・イマイチ。私の舌は母の味を覚えている。山本ワイズがブリテン 1 月号の中で、私の料理好きが母に由来すると書いて頂き、初めて其の事に気付かされた。嬉しい気づきである。当時、我が家は「男子厨房に入らず」であった。祖母が健在であり特に厳しかった。と言うよりも台所が狭く子供が邪魔だったのだろう。台所に行くと言ったと直ぐに「男は台所に来るもんでない」とよく言われた。しかし、そこは母が居る場所だった。母に甘えられる場所だった怖い父親のいない唯一の場所だった。しかし、母は優しい反面、躰に厳しく台所での「つまみ食い」はご法度であった。余談だが斜め向かいの、屋号そうしま（酒井）のおばちゃんの家ではそれを許され、よく竹輪をつまみ食いさせてもらった。それは、それは、美味しかった。

母は大変綺麗好きで、私が料理をし始めた頃、後片づけをしない私に愛想を尽かし「もう お前には流しを貸さない」と何回となく言われた。その御蔭で今では母並に、いやそれ以上に流しの後片付けが出来ると自負している。

羽咋中学時代、合唱部に在籍し山田和子先生指揮にて、NHK合唱コンクールの自由曲で合唱曲「一日に何度も」を歌った。最初のフレーズは「おかあさん おかあさん 一日に何度もおかあさん おかあさん あなたの名を呼んで月日が流れる」「小さな悲しみも あなたに告げて 小さな喜びもあなたに告げて わたしたちは育った」。照れくさくも母の顔を思い、母に呼びかける様に元気よく歌った事を思い出す。今日でも歌える合唱部時代の唯一の曲である。当時、町内に両親を「お父さん」「お母さん」と呼んでいる家庭は少なく、ほとんどが「とうちゃん」「かあちゃん」だった。晩年、母が羽咋より金沢へ転院した頃から母への呼び方を今までのおふくろ・あんた・おまん（羽咋弁）より「お

かあさん」に変えた。

「おかあさん」この言葉の中に温かい母・明子の存在全てを見るからである。

その母も昨年の12月、両親や夫が居る天上へと旅だった。89歳の長い人生の旅であった。それはこの愚息を思っでの長旅であったに違いない。まだ、温かみある母の瞳を開き「おかあさん オレが見えるか？」私の母への最後の語りかけであった。Kyrie eleison

おかあさん おかあさん 背比べしましょう
美しい 青空の下で おかあさん

12月例会報告

2月例会は藤井ワイズの司会により、定例のプログラム通り進められました。Happy Birthdayの該当者もなく、ゲストによるスピーチが行われました。

今月のスピーカーは写真館を営む2代目木下明彦氏でした。スピーチは、「写真は写す対象によって撮り方がかわること」「木下写真館の歴史」「これからの目標」について語られました。

はじめに写真には商品写真、建築写真、舞台写真、山岳写真、学校写真などがあること。商品写真は更に対象が、料理、工芸品、絵画など主に広告用に使うもの、更に特許をとるための写真もあり非常に幅が広い。

建築写真は外観の撮影に一番苦勞する。太陽の向きなど映す時間が限定されること、納期もあるので大変。



舞台写真では日舞などセッティングが大変なのと、ロケハンをして準備の必要もある。

山岳写真は「足」で写すことになる。朝早くとか、お天気勝負で条件の厳しい時がきれいに映る。

学校写真は卒業アルバム用が多く、撮影に1年かかる。肖像、スナップ、動きのあるものなどオールマイティの知識が必要と、撮影の裏話。

続いて、木下写真館の歴史について語られました。

大正13年に創業。陸軍第9師団の前で開業。歩兵隊に出入りしていたが、終戦になって軍関係の写真はすべて焼却しなければならなかった。戦後は学校写真が増えた。木下氏は写真には興味はなく、化学関係に進みたかったが、高3の時、尊敬していた父の後を継

西 信之氏 プロフィール

終戦3ヶ月前に本宮（福岡県）で出生。

長崎で小学中学時代を過ごした後、山口高校、九州大学卒。

東京大学物性研究所などを経て九州大学教授、自然科学研究機構を経て、現在、同機構名誉教授。

2018年から発売される予定の燃料電池の製造と開発にトヨタ、新日鉄住金化学等と係わっている。

ぐことにして写真大学へ。大学では広く浅くしか学べなかったのが、家業を継いだとき、父の後をついて歩いていた。

半年後、父が脳卒中で倒れたことが、今思えば自分を強くしてくれたと思う。

学校で使っていた35ミリのカメラとプロの使うカメラは大きく違った。よくボケているといわれた。白黒とカラーが混在していた時代でもある。

バブルがはじけて、写真業が貸衣装やブライダルに手を伸ばし、平成7年にはスタジオアリスが金沢に進出。木下写真館も平成8年2月21日平和町で新しい店をオープンさせた。何も持たず普段着で写真を撮りに来ても、目的の写真が撮れるよう、貸衣装室と美容室を併設した。金沢では一番初めであった。5、6年大変忙しい日が続いた。

その後、デジタルカメラが出てきて、現像、プリントを自社で行い、印画紙もデジタル仕様になったため、思う色が出なくなった。平成13年8月、デジタルに変える決心をし、イスラエル製を300万円で買った。しかし、着物の微妙な色、特に赤が出ない。9月から12月までの4か月間に10年分くらいのクレームをもらった。大失敗であった。泣きたい思いであった。ウイルスにやられたこと、パソコンの故障、バージョンが変わって開かなくなったことなどいろいろあったが、1年1年よくなり今では自信をもって撮った写真を渡すことができる。

撮影の時、例えば純真無垢で、しかし動物的な赤ちゃんを写すとき、「大好きだよ」「かわいいよ」と、母親と同じ気持ちで撮ると成功する。こちらがイライラしていたりすると、うまくいかない。

写真館の仕事ができることは幸せに思う。写真館にくる家族は、幸せな家族が多い。うれしい時にとる写真だから……。

これからの目標として、「品のいい写真」をとりたい。バランス、ライティング、構図、表情、ポージング etc.

(文責 山内ミハル)

~~~~~お知らせ~~~~~

☆部長訪問

今月は荒川恭次中部部長が金沢クラブを訪問してください。随行は早川政人中部書記。

☆YES 献金について

YES 献金を西日本区へ送金しました。  
200 円×10 人=2,000 円

4月の担当

聖句担当：山内ミハルさん  
ブリテン執筆：澁谷 洋太郎君  
澁谷 節子さん  
卓話担当：山本 達也君

~~~~~YMCAからのお知らせ~~~~~

☆金沢 YMCA 創立 70 周年記念式典について

日時：2016(平成28)年7月30日(土)
場所：金沢都ホテル (JR 金沢駅兼六園口)
講師：山田 公平氏
演題：「日本とアジアの青少年活動の夢」

☆スキー教室 無事終了

2月27日(土)白山一里野スキー場でのスキー教室は小学生9名、秋山、作田、朝倉理事長夫妻の各氏が参加し、上手に滑れるようになりました。

Happy Birthday

数澤 淑子さん 3月4日

~~~~~メネット報~~~~~

春、雑感

メネット報の執筆担当が回ってきました。昔は何を書いていたのかなとメネット報のバックナンバーを振り返ってみました。6年前の4月号を覗くと、上記タイトルで内容は誕生日を迎えての感想、滋賀蒲生野クラブの「20周年記念例会」に参加した時のこと、東京の家族を訪ねたときの孫たちのことなどがちまちまと綴ってありました。6年という歳月は長いか短いかは感じ方一つですが、6年前、小2と3歳だった孫娘が今では中2と小3、子どもの成長には驚かされます。自分はといえば年齢が6歳加算されたという厳然とした事実は素直に受け止めるとして、気持ちは少しも変わってはいないような気がします。しかしながら最近、色々な書類などで年齢記入欄があると一息入れてしまうのは何故？「えらい歳をとったもんや」とのため息かしら？

先日、新聞の投稿欄に短い文章を投稿したところ、「新聞見たよ、年齢違うんじゃない？」と言われ、「そこかい！」と思わず反応、投稿の中味より年齢の過不足の方が気になったようです。

歳のことは一先ず置いておいて、世の中の目まぐるしい変化には、最近ついていけないと感じることも多い昨今です。リタイアして10数年、当初夢に描いていた老後は、自分の時間をのんびりと優雅に趣味を楽しみながら過ごすことでした。ところがです。仕事もしていないのに何故こんなに忙しいのか、あっという間に一日が過ぎ、1週間が、1月が…、こんなはずじゃなかった、そろそろ身辺整理をしなければ時間がないと焦りを感じつつ過ごす毎日です。こうなったのには訳があります。暇を持て余してボケては大変と、その

対策として始めた趣味がひとつ、またひとつと増えて、ついにそれらに追われていることに思い到りました。最近になって止せばいいのに、つい手を染めたのが陶芸です。これも手先を使う作業は脳を活性化させると聞きかじり、子どもの粘土遊びの延長のつもりで“楽



しいかも…”といとも簡単に始めたのですが、これがなかなか大変なのです。以前メネット会でも陶芸教室で手ひねりだけの体験を

しましたが、釉薬や仕上げはお任せで、数か月後に立派に出来上がった作品が送られて来ました。それでも世界に二つとない自作品にそれなりに満足したものでした。ところが今回は基礎の初級1年、自由課題の上級1年と腰を据えてみっちり課題をこなさなければならぬので、チャランポランしてはついていけないし、窯入れや窯出しなどの窯当番が時々回ってくるので結構時間も取られるのです。それでも一生懸命に粘土から形を作り釉薬を施した作品が、どんな風に焼き

あがっているか、窯出しを待つ時は至福の時でもあります。思ったとおりにはないのですが、自分が生みだした作品ですから、たとえどんなに不出来でもわが子と同じでかわいいので



す。こうして駄作は増えるばかりでマイギャラリーが必要になりそうです。病膏肓に入るとはこのことか、そのうち自分用の骨壺も手作りできると精を出している次第です。  
(数澤淑子 記)